

百本の桔梗束ねし夢うつゝ

藤田湘子

桔梗は私の大好きな花。花入れに一本すつと活けるとあたりに涼しい風を運んでくれて、思わず背筋が伸びるような爽やかさ。可憐な蕾は紙風船に息を吹き入れたような形。きつぱりと開く紫の五裂の花は真つ直ぐこちらを向いて、嫌なものは嫌ですとでも言いたそうに毅然としてたおやか。野に咲く桔梗の柔らかさが好き。

あの桔梗を百本束ねるとはいかなる情景であろうか。しかも夢うつつとは。生花市場や生花店の従業員たちの働く場を想像しても、夢うつつとはかけ離れている。作者が、桔梗をあんなにもたくさん抱きかかえて束ねることが出来たなら、と夢のような気分で見えていたのかも。あるいは、夢そのものだったのかもしれない。